

授業協議会記録2年

「ふいてあそぼう」

授業者 金子 鮎美

協議題

「科学的な見方・考え方の基礎を養う生活科の授業は、どうあればよいか。」

1 グループ

- 理科のような生活科だった。グループでの話し合いをもとにして、全体で共有化することを大切にする。
- 素材が大切だと思った。
- 単純な（ストロー）素材がよい。だから工夫がふくらむ。
- 書くことで気づきを整理することが大切である。比べて見る、比べて書くことができるようにシートを工夫した方がよい。
- 工夫を重ねようとするとかえってうまくいかなかったようである。失敗を生かす今後の展開を大切にしてほしい。

2 グループ

- 「ふいてあそぼう」は、新しい単元であり、これまでに吹く力や風の力をとらえさせたことがなかったので、参考になった。3年生の理科につながる科学的な見方の基礎となると考えられる。
- 本授業のように「先を見通す」ことを取り入れた授業は、理科につながるので大切である。
- 友達を見て工夫することが自然にできていた。また、友達にアドバイスする様子も見られた。自分なりに工夫して試し、「さっきよりちょっととんだ。」と自然な笑顔がこぼれる子どもらしい姿も見られた。
- 本時の「よくとぶ」という意味付けが、「遠くへとぶ」に偏っていたように見られた。「高くとぶ」、的に当たるように「まっすぐとぶ」などの意味付けもあるはず。それぞれの目的に合った「よくとぶ」ストローにするために、どのようにしたらよいかを考えさせるべきである。
- はじめの話し合いの中で、ストローの組み合わせ方は4通り出てきたが、子どもたちがその4通りにとらわれ、もっと自由な発想で組み合わせを考えてもよかった。科学的な考え方に引っ張り過ぎているのではないか。自分のストローの組み合わせがベストだった子どもも、話し合いで提示されたやり方に変更してしまう姿も見られた。
- 生活科では、多様な体験が大切である。試行錯誤することで自然に科学的な見方が身に

付く。理科につなげたいあまり、体験が狭まってはいけない。

3 グループ

- 理科的な要素が色濃く出ていた。子どもたちが課題をよくつかんでおり、キーワードを意識しながら取り組んでいた。ていねいな指導が活かされていた。
- 基礎となる気づきをしていた。気づきの共有を大切にすることがよくできていた。
- 活動する中で、失敗から考えながら目的に向かって活動していて、それが科学的なものだと思った。
- 教師の働きかけによって、次の段階につなげていける。話型などの指導によって仮説を立てる力を身に付けることができるのではないかな。
- 生活科のねらいは自立への基礎を養うこと。そのためには、自己決定する場を意識的に与える必要があると思う。

4 グループ

- 子どもたちがどうしてそう考えたのかと理由を言うことは、科学的思考につながると思った。
- この授業を参観して、言葉と体験の一体化は気づきを表現することから始まるのが何となく理解できた。気付くことを大切にしていける事で、科学的なものを見方につながっていくのではないかな。
- 子どもたちが興味をもてる教材であり、思考しながら活動するにふさわしいものであった。授業全体の流れはよく、子どもたちは活動に集中していた。
- 子ども同士の学び合いがもっと授業の場面で見えればよかった。自分の言葉で気づきを表現できることが重要である。
- 子どもたちに見通しが見えすぎていた感がある。子どもたちにもっと試させてよいと思う。

5 グループ

- 「くらべる・ためす・くりかえす」のキーワードをもとに、見通しをもつてくり返し活動に取り組む姿が子どもたちの科学的な見方、考え方を育てていくのに有効であった。
- 「どうして？」という金子先生の言葉かけが、子どもたちの説明しようという意欲を高めていた。「どうして?」「なぜ?」という言葉が、子どもたちの科学的な見方、考え方を養うことにつながる。
- 以前、「遠くに転がす」という遊びの授業をしたことがある。遊びの中から子どもたちが見つけたことを教師が意味付けることで科学的な見方・考え方につながる。
- 子どもたちの科学的な見方、考え方を養うことは大切だが、その方向に意識が向きすぎているのではないかな。
- 子どもたちがストローを試行錯誤する時間がもっとあってもよかった。遊びの中から学びを見つけ出していけるように。